

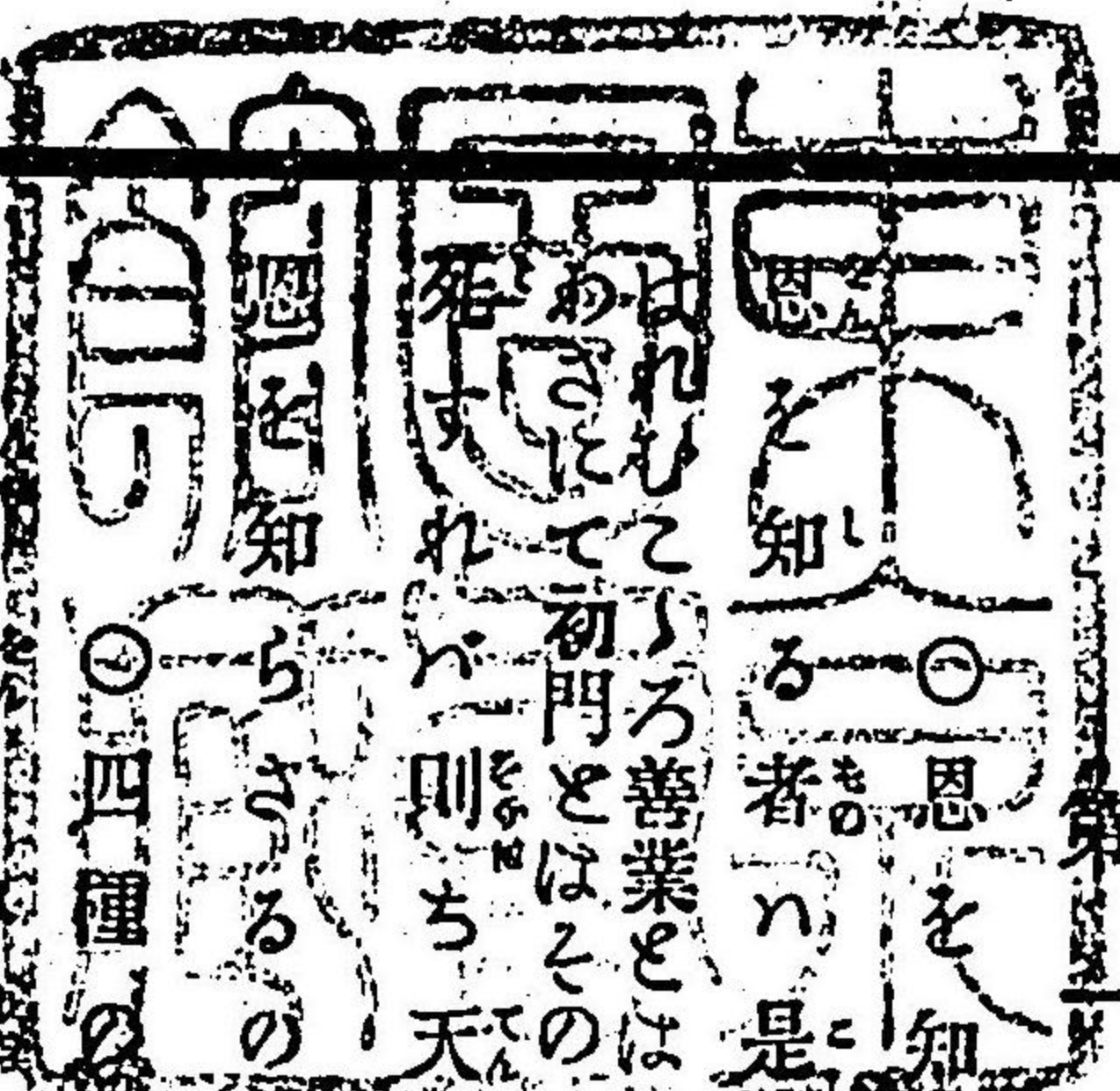
435
4
582

定乃枝折

敬愛舍出版

道の枝折

第一編



恩を知る者、是れ大悲の本善業を開くの初門あり。大慈とは、

死すれば、則ち天、人なり、畜生よりも甚し。大智度論

世間の恩に四種あり。一に父母の恩、二に衆生の恩、三に

國王の恩、四に三寶の恩。是の如き四恩は一切

の衆生平等に荷負す。荷負すとは、義の如きは是を能く世間を造るの

我が説く所の四恩の義の如きは是を能く世間を造るの



田と名く一切乃萬物是より生ぜ若し四恩と離れば得べり
 らせ譬へば諸の色塵の質を云ふ 能く四大によりて 四大の地
 而して生を得るが如く有情世間も亦復然り 有情世間と動物
 ありあるものを有情と云ふつり 彼の四恩よりて安立することと
 かわり差別あるを世間と云ふ 安立することと
 得たり「心地觀經」

○過と改めざれば罪來る

佛の言く人衆過ちあれば自ら悔ひて頓にその心を止めざ
 れば罪來りて身に歸るること猶水の海に歸るるが如く自
 ら深廣を成して何ぞ能く免離せん惡あれば非なるを知り
 過を改めて善を得れば罪日に消滅して後必ず道を得るな
 り「四十二章經」

○身の地の如し

身は譬へば地の如し善意の禾の如く惡意の草の如し草穢
 を去らざれば禾實成らず人も惡を去らざれば亦た道を得
 ず人の慚恚ある是れを地に蒺藜を生ずとなす善意は電の
 如し來れば即ち明かに去れば復冥し邪念は雲の日を覆ふ
 時見へざるが如し已に惡意起らは道を見せ「三慧經」

○善徳の情持すべきなし

貧窮乞人は底極下にして 底極下とは至極 衣形を蔽さず食
 趣かに命を支ふ飢寒困苦して人理殆んど尽さんとす皆前
 世に徳本を植へず財を積で施さず富有にして益溼み但だ
 唐得空くしてを欲し貪求して厭ぐまどなく肯て善を修せず
 犯惡山の如く積る小坐してなり是の如く壽終り財寶消散
 す身を苦しめ聚積して之が爲に憂惱それども已に於て益

なく徒らに他の有となる善として怙むべきなく徳として
特むべきなし是故に死して惡趣に墮し此長苦を受く罪畢
りて出ることを得れども生じて下賤となり惡鄙厥極にし
て人類に示同す「無量壽經」

○因縁果報

舍利弗初め阿説示比丘に逢て釋迦佛所説の法を問ふ比丘
一偈を説ひて之に答ふ偈に曰く「大智度論」

諸法因縁生法とは有形無形 是法説因縁 是法因縁尽

大師如是言

凡夫善惡を育ひて因果あることを信せずたゞ眼前の理と
見る何ぞ地獄の火を知らんや「寶鑰」

佛道本論に曰く夫を因とは世間事物の生起する原因

に就て云ふなり縁とは彼の因を助々長じて能く變化
するの法を云ふなり此の因ありて彼乃縁を感じ因縁
和合して一法を成就するを果と云ふ故に果は衆縁和
合の事物なり報は其事物よりて受くる所の禍福を
云ふなり是故に因ありて必ず縁あり因縁ありて必ず
果報あり而して其善縁に必ず善果報を引き惡縁に
必ず惡果報を受く是れ當然の理にして違るべからざる
れ數なり之を草木に譬へて云ふ其種子を因となす
地味氣候等を縁となす此因ありて縁に相應し自ら生
育蕃茂して花を着け實を結ぶを果と云ふ其惡因なる
も善縁によりて生ずるときと幾分の善果を結ぶべく
其善因あるも惡縁によりて生ずるときは幾分の惡果

を招くべし其惡を因として漸次に惡縁にふるゝとき
 と終に大惡果を結ぶ人間の因縁を以て言ひ其果報
 尽きて三惡道地獄餓飢畜生に墮落する時節も到來そべし之を
 又反して其善縁によりて惡因を轉じ漸次に善果を招
 き終に天上の樂果を受くるも決して疑ふべからざる
 の理なり

○天を仰て唾す

佛の言く惡人れ賢者を害するは猶天を仰て而して唾する
 が如し唾は天を汗させしてかへりて己が身を汗す風に逆
 ふて扱すれば塵彼を汗さずして還りて身を扱す賢者は毀
 るべからず禍必ず已れを滅せなり「四十二章經」

○人命之幾間小あるや

佛諸の沙門又問ふ人命は幾間あるや對て曰く數日の間
 に在り佛れ言く子未だ道を爲むること能はず復た一の沙
 門に問ふ人命は幾間にあるや對て曰く飯食の間に在り佛
 の言く子未だ道を爲むること能はず復た一の沙門に問ふ
 人命之幾間にあるや對て曰く呼吸の間に在り佛の言く善
 哉子は道を爲むる者と謂ふべし四十二章經 論語に曰く敏なると
 きは則ち功ありと世間出世間の業躊躇不斷空く貴陰を消
 過するときは畜功なきのみならず將に不測の患に罹ら
 んとす聞法修道の人お於ては殊に世出世の事に世出世は世
 のみち注意して孜孜汲々須臾も怠ることなれ

○誰れも代るもれなし

天地の間に五道分明なり 畜生人界天上なり 畜生人界天上なり 恢廓窳窳浩々茫々

として 恢廓等とて廣大幽遠にまて 善惡報應し 禍福相承く 身自ら之
 ん 當り 誰も代るものなま 數の自然にして 自然の道 其所行に
 應ず 殃咎命を追て 縱捨を得ることなし 善人之善を行して
 樂より樂に入り 明より明に入り 明に入る 惡人は惡を行して 苦より
 苦に入り 冥より冥に入る 誰か能く知るものなる 獨り佛の
 知りたまふのみ 「無量壽經」

○形よく人を化す

昔し一の賤き人あり 來りて 城邑に入て 一人の 服裝嚴淨あ
 して 大馬に 乗り 寶蓋を 執るを見て 好からずと 唱言せる 乃
 至再三 彼人怪んで 而して 問て 曰く 我れ 嚴淨なること 是の
 如し 汝何を 好からせと 云ふや 賤人の 曰く 君の 宿と 徳本を
 殖へて 此果報と 得て 威徳被服 人に 崇敬せらる 我は 昔し 福

を 殖へずして 鄙陋なること 是の如し 我を以て 君と比せば
 な 得禽獸に 如し 故に 自ら 好からずと 云ふのみ 君を 毀るに
 非ざるなりと 賤人は 是に 由て 感勵し 廣く 福業を 修す 夫れ 形
 の 尊きも 物と 悟らして 益そるところ 己に 弘し 況や 道法を
 以て 人を 化するをや 「維摩經注」

○報應懼れざるべけんや

世間の 事更相に 忠害す 即時に 急に 相破すべからせと 雖ど
 も 然せども 毒と 含み 怒りを 畜はへ 憤りと 精神に 結び 自然
 に 尅識して 相離るゝことを 得む 皆當に 對生して 更相と 報
 復すべし 「無量壽經」

歳寒窓放言に 曰く 古今の 亂臣 賊子 因果を 信せざるが
 へに 惡行を 擅にす 三好實休は 主の 細川持隆を 殺し

て其妻を奪ひたる者あり河州久米田にて討死せし前に夢に一首の和歌を感せり 草枯す霜亦けさの日に消て因果は早く廻り來にけり 弟冬康これを祝しかへて 因果とははるか車の輪れ外に廻るも遠き武藏野の原 されど遠近遅速はあきども報應の理と免れがたき也へに此歌祝しかへたりとも聞へて果して實休はどなく畠山氏の爲お討れたり大内義隆長門深川大寧寺お奔て逆臣陶晴賢の爲に廻られ自殺せし時うつ人もうたるゝ人を諸共如露亦如電應作如是觀如露一世れ中のことは露の如く電の如く暫驕奢放逸の人なれどもも止らぬを觀察せしと云ふころなり 驕奢放逸の詞怨書の辭にあらで佛法れ端をも親はれし故最後の詞怨書の辭にあらで優にさこゆ其時冷泉判官持豊血を以て大寧寺の破風

に書たる。見よやたつ雲も煙も中空に誘ひし風の末ものこらす 是を調伏の歌と云ふ 調伏とは強惡するものを天道好還の理を含みて讀みたる者なり果して陶晴賢宮嶋の役に毛利氏の爲お誅せらる凡篡殺の報 篡殺は位君をころす 其迅速なる者和漢亦例多し 就中安祿山反して未だ幾ばくならせして目替し其子慶緒の爲に殺さる慶緒また史思明の爲に命を授く思明降て又叛く祿山同惡の者にして其子朝義の爲に殺さる朝義未だ幾はくならずして亦官誅に伏そ其間僅に七年父子君臣かはるゝ 殺害して安史の族殲きたり 明智光秀織田信長を殺せるは六月二日にして山崎に軍破れ身小栗栖に亡びたるは同十三日あれば其間僅お十一日なり

好淫の迷かなる懼れざるべけんや然るも報應の説俗
聖世間の亦之を言ふ易よ云積善の家は餘慶あり積不
善の家にて餘殃あり又云天道は善も福も淫に禍ひま
書に云善を作せば之に百祥を降し不善をなせば之に
百殃を降そ曾子云之を戒めよ之を戒めよ爾に出るも
れは爾に反るものなり

○舌を割くの患

財色の人に於ける人の之を捨てざる營へは刀刃に密ある
が如し一餐の美に足らば小兒之を舐ふれば則ち舌を割く
の患あり「四十二章經」

日本道徳論に曰く今世間の人を觀るに大抵は色と財
とに感溺し憒亂煩躁きて之を求めんと欲す是に由りて

己が靈智を暗まし殆んど盲者の險路を行くが如く其
得る所は其望む所の十分一にも達すること能はずし
て舌を割くの禍よ逢ふ者此々皆是なり獨り今時の人
のみ亦ち古來の歴史を閱するも此の如き實迹甚多
し

○善知識お近づくとへし

世尊長老難陀と共に一の賣香郎に至り彼の郎上の諸香囊
香つゝあるを見畢りて即ち長老難陀に告て曰く汝來りて此
郎上の諸香囊を取れと難陀即ち佛の教に依て之を取る佛
言く汝漏刻一移の頃に於て捉持し漏刻一の時計の然る後地に
放てよと難陀一刻の間に於てまた地上に放つ爾時佛難陀
に告げよばはく汝今當さよ自ら手を喚ぐべしと難陀即ち

自ら手を喚ぐ佛難陀も語りたまはく汝此手を喚げば何等の氣をなすや佛に白まて言く世尊其手香氣微妙なること無量なりと佛難陀に告げたまはく如是如是若人親しく證の善知識も近づき常も共居り隨順染習それを相親近するが故に必ず當るに廣大の名聞を得べま「佛本行經抄出」

○落花情なし

蕭齊の時范縵と云ふ者あり盛んも無佛と稱そ其時竟陵王子陵と云ふ人の篤く佛法を信ず或時竟陵王が縵と謂て曰く君は因果の道理を信せざるが今現に富貴貧賤あるは何の故ぞと范縵答て曰く人の生るゝは樹花の同く發くが如し風も隨て散すまば或は簾幌を拂ふて茵席の上に墜ち或は籬牆にふれて糞溷の中に落つ其茵席に墜つる者は殿下

あり糞溷に落つる者は下官あり貴賤は異なりと雖ども因果又は關せざるなりと此等乃言も一往聞けばさもあるべき様なれども再三思惟して看よ道理に應せざるなり花の風に隨ふて散するはあるほど一時の柏子もて茵席乃上に墜つるも糞溷の中も落つるも強て差別をなひ其故を花の當りまへを云ふに茵席の上も墜ちても苦もなく樂も亦く好まこと、も思はねば惡事とも思はぬ人間はそれとは大に違ふ貧あるを自身のみならず親屬まで苦む富貴なれば自身のみならず親屬まで榮耀す花の散ると同あらま世智辨聰の人は世智一は伶俐な譬のとりやうもあたぬこといもなり古人も死生命あり富貴天に在ると云ふて風の吹て來る如しとは曰はぬ伯牛が手を執りて斯の人にして斯疾あり

り命なるるなと云ふて風に吹かる、如しと曰とす此等を以て看よ人間一生の貴賤貧富患難逸樂時の柏子とばかり云はれぬ因果の命を受くる所有るべきあり「十善法語」

○心あるもの皆當お作佛すへし

如來は一大事因縁の爲の也へに世に出現したまふ唯佛の知見を以て衆生に示悟せしめ衆生をして佛の智慧に入らしめんと欲そ是をもて種々の方便を以て一切衆生の爲に成佛の由となすなり經に曰く凡そ心あるもの之皆當に作佛すべし所以に常不輕菩薩毎に十三字をもて人を教化す但だ言ふ我れ敢て汝等を輕しめず汝等皆當に作佛すへし芝苑世の佛理を解せざるもの常に佛教を以て吾人を卑屈よ滔る、は誘導をなすものとなす是實に誤謬の大なるも

のと云ふべし今常不輕菩薩の一切衆生を輕賤せざる所以のものを吾人佛皆當に作佛すべきの心性を有まればなり之を以て之を觀れを我佛教の宣示するところは畜に吾人の踐踏せる彼我の小權利を喋々するが如き狹隘卑低の域に安んぜせ正に大に超越して諸佛と平等お大自由大快樂の位置に達せしめんと欲するなり豈に之を卑屈に誘導するの教と云ふことをえんや

○懈怠は衆行の累ひ

夫懈怠は衆行の累ひなり在家懈怠なるときは則ち衣食供せせ産業舉らせ出家懈怠なるときは則ち生死の苦を出離せること能とせ「菩薩本行經」

歳寒窓放言に曰く凡萬事互りて過の出來るは怠

慢より起る善心と用ひざれば懈筆多く農心を用ひ
 ざれば秀苗長をさせば人縝密の氣象なきとき破
 敗の事つねに随ふ故に古語に事の忽のせにする所
 に破ると云ひ或は禍は懈情お生ぞと云へり然るあ
 その危険の處お於て過を生ずるものなま是戒懼の
 情あるがゆへあり仕官の人漸く登庸せられいつと
 なく放肆又流れ病者回復又趣くを以て保養に懈る
 故に易の繫辭に曰く君子の安にして危を忘れぞ存
 にして亡を忘れず治よして亂を忘れそ是を以て身
 安んぞて國家保つべきなりと徒然草に載す高名乃
 木のぼりといはまじし男人の高き梢に居る間は何と
 もいとす下り來りて軒だけになりたる比過すなど

言をかけたたり人怪で問ふに眠くるめさ枝危さほど
 はをれそが恐れ待きは申さず過と易死所にありて
 必仕る事に候と云ひたる試に松言なりさきは兼好
 もあやしき下筋なれども聖人の誠にかなへりと稱
 嘆せり梵岩禪師過橋の詩縝密小心を勸む人々壁間
 又貼して省心に備ふべし
 行至斷崖橋亦危 心々歩々不他移
 平居措意長如此 涉世何人履禍機
 ○父母の恩に報ゆる四事
 父母の子に於る大苦勞有て護持長養し資るに乳哺を以て
 すとひ一肩に母を持ま一肩に父を持し百刻と經ども徒
 らに自ら疲勞するのみ或は七寶種々の供養を持て富樂を

得せしむるも亦未だ父母の恩を報ひず若し其父母無信の者たれば信心を起さしめ若し無戒の者たれば禁戒に住せしめ若し性慳の者たれば惠施を行せしめ若し智恵なき者たれば智恵を起さしむ子能く是の如き方の報恩と云ふ「毗奈耶律」

○五戒五常

夫れ世俗の尙と云ふところ仁義禮智信なり五常
有情の資るところ殺盜姪妄酒なり戒道俗相乖くといへども漸く教へは相通するなり故に仁は木づくもの則ち殺さざればを奉むるものは則ち盜まざればを執るものは則ち姪せず信を守るものは則ち妄せざれば智を師とするもの則ち飲酒せず「法苑珠林」

○内治生と外治生とあり

内に生を治むることあり外に生を治むることあり
よび諸の珍寶を索むることは是れを外治生とあす意を守り道を念むるは是れを内治生となす人自ら意を伏せること能はざるを返して他人の意を伏せんと欲は能く自ら意を伏せば他人の意を悉く伏せし「三慧經」

○友に四品あり

友に四品あり一には花の如き友謂く好き時は頭に挿み萎む時は地に捐棄す富貴を見ると死に則ち附し貧困なるときは則ち捨つ是なり二には秤の如き友謂く物重ければ頭べ低れ物輕ければ則ち仰ぐ興ふることあるとき則ち敬ひ興ふることなきときは則ち慢る是なり三には山の如き

友譬へを金山の如く鳥獸之に集れば毛羽光を蒙る能を貴
 とび人を榮し富樂同く歡ぶ是なり四に之地の如き友百穀
 財物一切之を仰ぐ施給饗護思不徳又厚くするもの是なり
 學前の二は小人の友にして親交そべからず後の二は最も
 益多きの友にして世間其類酷だ抄なしたとひ金山大地の
 如くならざるも苦樂を共にし富貴貧賤に由りて交際に冷
 煖をなさざるものは君子の交りにして善友と稱すべ死な
 り柳子厚墓誌銘に曰く今夫平居里巷に相慕悦して酒食遊
 戯相徵逐し請々として強て笑語し以て相取下り手を握り
 肺肝を出して相示し天日を指して涕泣し生死相背負せざ
 ることと誓ふ真に信せべきが若し一旦小利害の儘に毛髮
 の比の如きに臨めば反眼して相識らざるが若し陷阱に落

つるも一さび手を引て救はず反て之を擠とし又た石を下
 そもの皆是なり此れ宜に禽獸夷狄も爲すに忍びざるどこ
 ろにして而て其人自ら視て以て計を得るとなすと今日人
 情浮薄にして世間の交態概ね此類にあらざるはなし學佛
 徒奮つて挽回の責お任せざるべけんや

○酒過失多し

飲酒に十の過失あり一には顔色悪し二には力少し三には
 眼視明かならむ四には嗔相を現す五には田業資生を壞す
 六には疾病を増す七には鬪訟を益す八には惡名流布す九
 には智慧減少し十又は身壞去命終りて三惡道お墮す四分律

○近交するところお由て變す

一切の衆生三界欲界色界無色界生死の大海を出んと思はゞ必を法

船と假りて方さに渡航することを得べま法は清涼となりて煩惱の熱と除き又妙薬となりて能く結病を癒し又衆生は眞善知識をして大利益を施し諸乃苦惱を濟ふ然る所以は一切の衆生思惟定りなく染習する所も隨がふ善に近づけば善に惡に近づけば惡にして若し惡友に近づけば則ち惡業をなして生死に流轉して遂際あることなし若又善友に近けば信敬のこゝろを起し妙法を聽受して必ず能く三途の三途の三のみち即ち地獄餓飢畜生なり苦惱を離れしめ此功德によりて最勝の樂を受くるもれなり「附法藏經」

○塵垢の人

昔一人あり兄弟あるなし小兒たりし時父母之を憐愛し師友の所に將詣して將一ひき升ま之に書學と勸む其兒憍蹇心を

用ひぞ朝に受くれば暮れに棄て年を積て知識する所なし父母呼歸して家業を治めしむ其兒憍蹇力を勤むることを思はず家道遂に究し衆事弛廢す其兒放縱にして願録するところなし家物を糶賣して快心态意を亂頭跣足衣服不淨なり恥辱を避けん愚癡自ら用ひ人又賤惡せらる國人戚な憎みて之を兇惡と云ふ出入行歩共に語るものなし自ら惡なるを知らずして反て衆人を咎む上は父母を怨み次に師友を責め先祖の神靈肯て補助せざ我をして零丁輻軻卑賤おして志を得此乃如くならしむ如く佛に事へて其福を得べきよと云ふて即ち佛の所に到る佛の爲に禮をなして前んで佛に白して言く佛道寛弘容れざる所なし願くは弟手となることを許さきよと佛この人に告げたまはく夫道

を求めてまきに清淨の行を行ふべし汝俗垢を齎らして我道に入り徒らに自ら去就するも何ぞ長益する所あらんや家に歸りて父母に孝事し師長乃教を誦習志命を没するまて忘れそ居事を居つねの勤脩し富樂おして憂なく禮を以て自ら將ひ非空を非無にあらさ犯さす沐浴衣服して言行を慎み心を執り一を守りて作す所の事辨じ微行精修にして人に嘆慕せらるゝに如かす此の如きの行乃ち修道のみと是に於て世尊偈と説て言く

不誦爲三言垢 不嚴爲三色垢 慳爲三惠施垢 不善爲三行垢
今世亦後世 惡法爲三常垢 學當捨此比丘無垢
空中之垢 莫甚於癡

其人偈を聞て自ら憍痴あるふと知り佛の教を承て歡喜

してかへり偈の義を思惟し改悔自ら新にし父母に孝事し師長を尊敬去經道を誦習し居業を勤め戒を奉じて自ら攝し道に非ざれば行はす宗族孝と稱し郷黨悌と稱そ善名國內に遐布して賢と稱そ三年の後また佛の所に至り五躰ふ禮をなし懇惻自ら陳す惡と棄て、善と爲し上下慶を蒙る願くは大慈を垂れて弟子となまたまへと佛の言く善哉と遂に弟子となりて道を得たり「法句譬喻經抄出」

○君王の恩大あり

國に君王有て一切安きことをうるなり是故小人王は一切衆生安樂の本となす在家出家精進道檢皆正國み依て而て住持を得演説流布す若し王力あくんバ功行成らす法滅餘りなし况や能く利濟せんや是故に修するところの一切の

功徳六分の一は常に國王に歴す願くは王福山の如くも崇
く固くまて壞るゝまとなからんことを「後譯華嚴經」

○慚愧

二白法の善法と云ふ能く衆生を救ふあり一には慚二には愧
なり慚之自ら惡を爲さむ愧は他をして惡を造らしめ慚
は内に自ら羞恥し愧は發露して人に向ふ是を慚愧と名
く便ち能く三寶と敬重して諸の惡業を滅す經涅槃論語に曰
く過ては則ち改むるに憚ること勿れと慚愧して改悔そべ
きのことを改悔せず驕傲自ら用ゆる者は邪見の增長せる
ものにして其惡日に積り過の過たるを知て之と掩ふとき
は道を去ること愈遠く終る過ちを遂ぐることを勉むるよ
至る豈に深く懼れざるべけんや

○禍は口より生ず

人の世間に生ずる禍は口より生ず當に子に護るべし猛火
よりも甚し猛火は能く一世を焼く惡口は無敵の世を焼く
猛火は世間財を焼く惡口之七の聖財を焼く七聖財とは信精
惠なり是故一切の衆生禍は口より生ず口舌は身を鑿るの
斧あり「報恩經」

○天下泰平

佛の遊履したまふ所ろ國邑丘聚化を蒙らざるはなし天下
和順し日月清明に風雨時と以てし災厲起らそ國豊かみ民
安し兵戈用ゆることなく徳を崇め仁を興して務めて禮讓
を修す無量壽經

○心得

耳を以て聽受して得る者は目を以て看讀して得る者の廣
には如かざるなり目を以て看讀して得る者の心を以て悟
明して得る者の其廣と極むるには如かざるあり心を以て
君と爲し目を以て臣と爲し耳を以て佐使と爲せば可なり
目を用て心に當るは斯下なり耳を用て目に當る又下の下
なり「竹窓隨筆」

○寸陰を惜む

古に謂ふ大禹は聖人あり乃ち寸陰を惜む衆人に至りては
當に分陰を惜むべし而して佛の言く人命と呼吸に在りと
夫分陰の中に多くの呼吸あり則ち我輩何を止だ當に分陰
を惜むべきのみならんや一刹那一彈指時間片極短を云ふの陰も皆惜
ますんばあるべからざるあり昔し伊菴權禪師晩お至りて

必ず涕を流して曰く今日も亦只空く過ぐ未だ知らぬ來日
の工夫いかんと其の精を勵ますこと此の若し予晨朝日の
出るを見るごとに則ち伊菴の此語と憶ひ曰く今又一日を
換へたり昨日既に空く過すことをなす未だ知らず今日の
工夫いかんと然れども予但だ嘆息して未だ嘗て涕を流さ
ず是を以て知ぬ道を爲むるの心古人も及ばざる遠きこと
甚しきを愧ぢざるべけんや勉めざるべけんや「竹窓二筆」

○煩惱お安んずること勿き

煩惱具足の身なればとて心にまかせて身にもすまじきこ
とをもゆるし口にも言ふまじきよとをもゆるし意にも思
ふまじきことをもゆるしていかにもこころのまよてあ
るべしとまよしあふて候らんこそかへそく不便よおは

候へ酔も醒ぬさきになを酒をす、め毒も消やらぬにい
 よく毒とぞ、めんが如し薬あり毒をこのめと候らんこ
 とはあるべくも候はずとこそをば候ふ末灯よく此教誠
 を骨髓も銘じて忘れさるときは邪見我執の念日に消し世
 に處し人に接するの際に於て必ずや狼戾放恣の弊惡を脱
 することをゑん眞も護身の妙符と稱すべきなり

明治廿一年七月廿一日 印刷
 明治廿一年七月廿三日 出版

編輯兼發行者

大阪府西成郡北野村百三番
 屋敷寄留 嶋根縣平民

龍川賢流

印刷者

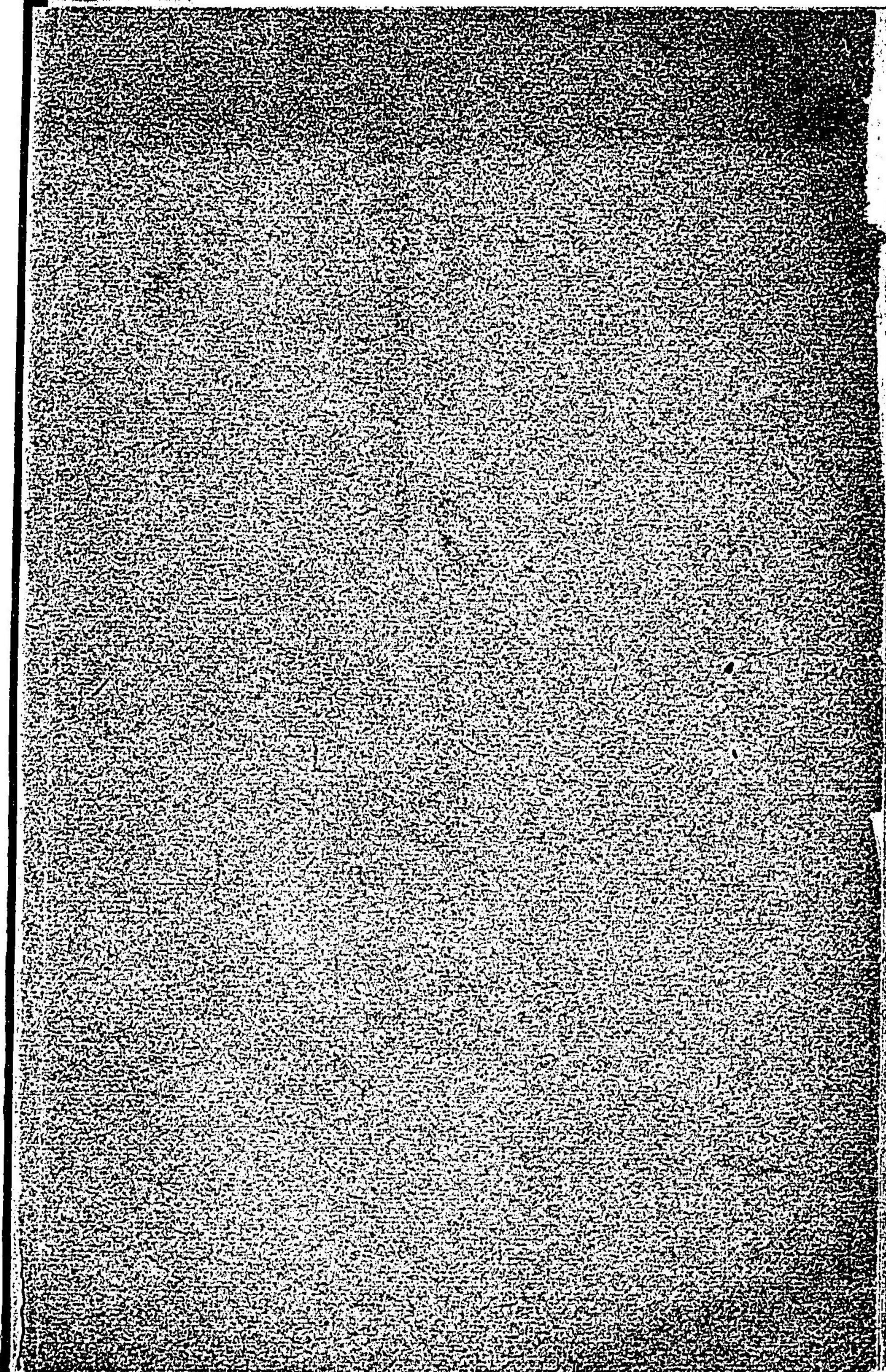
京都府下京區第廿九組
 鹽小路町第七番戶平民

山本留吉

京都府下京區第廿三組柳町九番戶

發行所

敬愛舍



015982-000-0

特15-443

道の枝折

龍川 賢流 / 編

M21.7

ABC-1812

